

金曜 ライフ・楽しむ

シニア世代を応援するページです

あずましい居場所 もう一度探して

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」
編集長・真鍋康利さん



初めて自分の部屋をもらえた時のことを覚えていますか。

私は小学校高学年になった頃でした。階段下の畳一畳の物置を使ってよいことになったのです。待望の自分だけの城は、窓もなく、小さいけれど、とてもうれしかったことを覚えています。

机を置いて布団を敷くともう満杯。壁に日程表や好きなポスターを貼り、鍵がないので勝手に開けると物が落下する仕掛けも作りました。すぐ前の居間に家族がいますが、中は自分だけ。気兼ねなく本や漫画を読み、たまには勉強、そしてうたた寝。兄弟げんかの避難所でもあり、これこそ自分の居場所。とにかく落ち着く空間でした。

北海道弁の代表的なものに「あずましい」という言葉があります。「落ち着く」「居心地が良い」といった意味で、実際には「落ち着きがない」「おさまりがない」という意味の「あずましくない」という否定形で使われることの方が多くあります。

語源には諸説ありますが、「我が妻がそばにいるような居心地のよさや安心感」という意味、漢字で「吾妻」と「と書く」という説が最もあずまし

しい。北海道へ来てこの言葉が一番気に入りました。そしてあの小部屋は、あの頃の自分にとって、あずましい場所だったのだらうと思います。

最近の高齢者の中に、周囲を威嚇し、怒りを爆発させる男性をよく見かけます。「暴走老人」です。なぜそんなに怒っているのでしょうか。

こんな姿を想像しました。子育てが終わると、子どもたちはそれぞれの道を歩き出します。気づけば一人きり。会社をリタイアし、いつの間にか世界は狭くなった。後輩たちは寄り付かず、親しい友人も見当たらない。世の中の急激

な流れについていけず、聞こえてくるのは理不尽で情けないニュースばかり。待たされるのが嫌で、自分の非を認めず、できない自分にもいら立つ。「なぜ自分だけが」と不公平を感じて許せない。身近な人がいて、体の奥深くにたまったガスの噴出を受け止めてくれたらまだしも……。

そこで、一見弱そうな人や、言い返せない立場の人をガス抜きの対象にしているのではないだろうか。

その男性にとって、家そのものが個室です。扉の外にも内にも人がいない毎日。置いてけぼりを実感することは孤独です。大勢の中にいるからこそ、個室に意味があり、そこで充電して明日への活力が生まれます。

皆さんも、今こそ世界を少し広げ、自分のあずましい居場所をもう一度探してみませんか。